

【収録1.】

1. 神戸新聞 朝刊コラム 正平調より 神戸淡路大震災 神戸の記憶

◆「ボランティアは押しかけていい。迷惑をかけてもいい。その何倍もいいことをすればいい。来てくれただけで、本当に喜ばれるのだから」。昨年、能登でも同じ言葉を聞いた

**正平調**

つかみどころのない問いと知りながら、聞いてみた。震災30年で私たちが学んだ最も大切なものは何でしょう？◆神戸大名大学教授、室崎益輝さんの即答を忘れることができない。「それは市民社会です」。国や自治体、個人が防災力を高めること。そのための仕組みや予算を充実させること。それ以上に大切なものがある。そう語る室崎さんに迷いはなかった◆市民社会とは実に幅の広い概念だが、私たち一人一人の善意が自然に集まって形になり、支え合う社会のことだろう。その寛容さと柔軟さは、この30年で育つたろうか◆いや、社会は逆に不寛容と硬直に向かっていくのではないか。それが室崎さんの心配事だった。能登半島地震では心の底から自然とわきおこる善意にブレーキをかけるような「ボランティア迷惑論」が広がった◆さかのぼれば、東日本大震災の時に同じことが起きた。交通渋滞を招き、救援の邪魔になる。宿泊場所がない。素人には危険…。これも室崎さんの言葉から。「ボランティアは押しかけていい。迷惑をかけてもいい。その何倍もいいことをすればいい。来てくれただけで、本当に喜ばれるのだから」。昨年、能登でも同じ言葉を聞いた◆阪神・淡路大震災30年が近づくと、この話はあすも続ける。 2025.1.15

◆公平、理屈、効率といった「官」の論理にとらわれず、必要があれば行動する。ボランティアから生まれた思想が社会のありようを変える。この熱源を消したくはない。柔軟で活気のある自由な社会は強く、優しい。 2025.1.16.

**正平調**

阪神・淡路を代表するボランティアといえは…と考えると、大勢の顔やグループが思い浮かぶ。30年がたつ今もあちこちの被災地で支援が続いている。その気概と持続性が「市民社会」の土を耕し、種をまき、木を育てるのだと感じる◆やっと、というべきか、政府は昨年、ボランティアに必要な費用の一部を支給する方針を示した。活動は無償でも、駆けつけるにはお金がいる。被災地が遠いほど足が遠のくのは当たり前だ。新たな助成の仕組みが市民社会の肥やしになればと切に願う◆ボランティア割引制度の導入をずっと国に求めてきたのは、ひょうごボランティアプラザの前所長、高橋守雄さんだ。仲間と街頭で署名を集め、国に届けた。制度がないなら作ればいい。時間はかかっても前へ◆いまも神戸の市民団体に語り継がれる言葉がある。「言われてもしない。言われなくてもする」。震災から間もないボランティアをまとめた牧師草地賢一さんが残した◆公平、理屈、効率といった「官」の論理にとらわれず、必要があれば行動する。ボランティアから生まれた思想が社会のありようを変える。この熱源を消したくはない◆「災害救援はジャズのように」と表現した人もいる。柔軟で活気のある自由な社会は強く、優しい。 2025.1.16

◆遠く離れた町で故郷の被災に心を痛めた人、リュックを担いで駆けつけた人、語り部の方の話や授業、職場の研修で学んだ世代。震災に寄せる思いは人それぞれ。それでいい、それがいい。これからも寒い朝には目が覚めるだろう。

31年になっても、40年が過ぎても。そして、込み上げるものを抱きしめる。 2025.1.17.

**正平調**

寒い冬の朝、まだ暗い時間にふと目が覚めることがある。何時だろう、と枕元の時計に目をやる。それからあの時刻になるのをじっと待つ。午前5時46分。大きな揺れを体感した時刻が巡ってくるのを◆「年が明けるとそんな朝が増えるような気がします」「もう30年ですね」。そう言って、阪神・淡路大震災の追悼行事で隣り合わせた人とうなずき合ったのは、今月のこと◆この1年、朝刊連載「震災ダイアリー」の切り抜きに精を出した。写真と記事を通して1995年の出来事に思いをはせる。弔いと別れ、生活の立て直し。あの日々は忘れない、というより忘れられない◆先日、神戸出身の作家砂原浩太郎さんが自らの体験を基に小説「冬と瓦礫」を出した。震災の当事者ではないことへの後ろめたさ、やましが執筆の原動力という。取材記事で語っている。「災害を風化させないためにはいろいろな視点が必要では」◆遠く離れた町で故郷の被災に心を痛めた人、リュックを担いで駆けつけた人、語り部の方の話や授業、職場の研修で学んだ世代。震災に寄せる思いは人それぞれ。それでいい、それがいい◆これからも寒い朝には目が覚めるだろう。31年になっても、40年が過ぎても。そして、込み上げるものを抱きしめる。 2025.1.17